蓮
1.45
上

寒温奇談二卷之五

五　鴛夫婦鳥と化して貞節を完る話

後冷泉帝の永承年中。奥州六ヶ郡の司。厨川次良太夫安倍貞任を滅ぼし。逆威を大東に振ひ。源頼義朝臣を再び大将軍を揚て。五年夏六月。河内の番呂岩を攻て。奥陽に兵を挙らんとしける。毎度官軍に利あらず。足をや前九年の挑戦と。世にいひ伝へる所なり。扨て天喜元年冬十月。名海の合戦に。安倍大夫敗北して。数住和氣致頻を始め諸將乃討死毛挙にいとまなし。されば家人の内。後七騎あり。落ち延び。人馬乃を塞き。用もいてそれぬ所物にて。彷徨して。その内清国

一見の法門によて立山禅定を志し。拂ひ立霞と共に故郷を出。杖を紅毛
國々の修行に赴く。白河の関路に行暮。麻の衣に秋風のかよひゆく
を拂ひ。素より此彼千里人煙を絶て斜日雨に沈く黙雲四方に拂り。其八
ぐで天をかぎりとし。風まさる返照の色いつれば物凄く心細くと
ちらしよく人の手足血まづに散乱し甲冑太刀皆組てかさなり積る
ある戸ハ両枕に倒るる者あまた首ハ谷に倒る老あり。踏に肉も
ずそも。無常迅速の波今ちまたに観念ありゆきて世河にそふる
屍は山のかばね声をそ隠るる。山伏狐狸の我を慰せんや。
嫌して去ぬ浅ましき青びかる武士の雑還流矢を
んて。錦繍の袖より骨を拾て去るが。其侭廻向てあり。僧是をんで人を
ずる毎に我に懺悔の昔語をのべて。和僧に語らん旨ありといふ。僧是を聞て云

海討死したる旅魂過去の主へすすむるなり。何を物語る此云らぬと拐
中にありし侍なり。我父元は司の家人にて鶴岡といひし京都の侍
なりしが。髪を結ふよりの女房あるを太内の官女に貢して
細ありて里に拂り居るより。浅からぬ契りを結び。明暮かはる事なかりせ。
て契り深く中妻懐妊して此月産すべき事に当まで独東夷の一乱
いできたりて八幡殿軍勢を催し。追討役の軍役を觸らされ我も罪
云ふ荒まて不日に向せんとて其夜妻に對し我家を去て奥州へ下
らば生死の二ッ知るべからず。海よく家をもちて其男に見せべしと
契するなるんと云ければ妻泣て答もやらず。鬢の束を切て形見とし
髪を束て秋に解よしとのみ。此来を経るとも解ず
誓言て云しが今後ゆめ和僧京都のものならば我が家に

存分に深く女の怨霊のたゝりなれば我言を告て長く其男にむかひ哀れに実
なりけれど云。漢の光澄あしへ我ために刺殺して書びてんだあらば我猫を
負て山に八十餘日がる兄弟ら妄念をも云ひさらん是を和尚の法にして
女房に送りが舎上とおぎ衣の裾の袖を解てるに血をすてゝひ付るを見れば
僕其の外ぐ演らるよふに香るを妄るゝの声のこゝぞなく
浸さして僧徒を招き入りくとおゝ妻の父に惑溺し。天涯蒼卿の鬼となる
ともあんの益るおゝん士が拝せし言の外は貧乏の苦しみ中笑へん。ぐ
疾に従ひて係念するなれば時和尚の教化によりて掌を合せ
憐の妻に今は水き法あたいに足を洗て僧の身もそなら婦の衣の
袖を袋の中に成ね足速に立さる又虫の鳴声の夜しく我を呼
まやと立の空を振りて枝を見せば幽霊せらしくと実に訪らば相様てとぞなり

口ぐるり動く世をかしく其まし殺へてむかしくなる。偏参の僧お侍りふあさ
ましくて死骸を西枕に伏さしめ静かにと念誦し。備志来の旨を知おそ
急ぎ宿所に上り。彼女房をよび出し。示して手ての紀念の袖をかえ
見せれば女房是を見ても見へず。血を吐て悶絶し。手脇だらしく鼓り給ふ
ちは手をてに法巡む僧も憐れと感動し。その夜のうちは志くて出さらぬ
滅や浜の石楊秋霜を貫く烈女の情女房儼然と涕をとゞめ自云我今
妻として夫の白骨を千里の外に視て無念さゝへ得ぬ事まで抓痕の
さあて戸を喰ま肉を腐し骨を殺さんずらあんぞ恥ざらん。今夜に旧男
姑あり。夫が乱を給ぞもよしや何せん命の限り尋ねめて葬んのき
と云ひ立りる時斎名の夫の首に合わ寄し伏し。我いたて数十間
を経く其の地にぬされば安。平砂瀬ぐとし葦萱荒しさるのことまで

驚くこと究む。風よ吹かれ来れ。こゝ流々に埋没せり。世房ハ死
人の骨となる毎に。指を噛て血を流す。血の骨に我血の骨に拭ひ切ざるかい。
正しく我まゝ也せるべし。天の行ひ地よ拓きひこゝとよこてよと笑
さ海よ。おく〻する。数日の怪。重重一つの死状身おそく捧ることう
祭あるう。清せ心正よ血に染て。なよ深る。これ人ん紛るきと忘れ。まの使用
水深こそ。まくも戸鼠を挫動し。天よ鞠ひ足を頓地を震ひ。恐哭一変
嘔亜として孔起孔起。起天よ。さこやもそんぴ時安倍を住ハ去ぬる戦
よ情後星拍掌堅く国府をまゝり。家宇ひあ世なの人ハ新義父よ
恐ることゝ。皆攻ることゝ退る。栗坂の山よ旗する。柿のごく
幔幕を作せ。陣屋を構へ。角を焼たぐ。あて猛旗の色を閃せ。大小攻
撃の機物をなせども。安ハ方住性嫌ゝて。徒然のあまり。法大弱の

教ふ。こゝ宮上廊の遊女とも。昼夜踊をうゝひ。我をまゝ
せ〻。法よ教十日をぞるて。来前教る。武のやうう。兵ども皆
遊女ら抗よ流涙く。爰ハて軍哭も遥の主方に。女の泣涙ハ千変ハ
悩然うて皆涙を流し。故ハよ涙を素やるのいるゝん拓悩ハ海
し夜方住耳を歌ニ王をきて。弱の嘶くふもこの〻。房の悲哀ハ
いつ〻ぢまゝ大よ怪こをゝ。自身住ハ候せんと長ゝるゝ馬跨ハ従率教
十人を率し。績拓教十把を燃しつまく。敵を拓重て左面を捜し
来むし夜月冷し。風凄〻うて。人の孔骨よ沿ゝ。ゝ市おも
まゝ哭凄〻うけへ。曲のゝて毋ゝんるまゝ。是を操足を実て矢住ら
る前ゝ。ゝ。伴の女若よ拓ゝる屍をゝきいざゝ。法低し歌の
疲労れ。哭ハ。豆姫つきられ。容ゝこのふゝしゝさ

実も夫年の女房のごとく驚きて目を開くに、夫の姿を
ながめ、歌く。夫は狂の女房なりと知りよろこび、杞憂消さんこと歌て
打領対く。先稱伊勢の乙女とも、顔なり異美なる一途り
立ちる時、女房ハ何も夫の傍をたのもしくおもふあるべし。国く地に就て動うを
貞任紀ハく。死骸を探つまこさせ。女房を兵に負せ。山体さて立帰る。
うて貞任他さこと流るも、表さきこを去りて遊女の中にも出さる。
あ様、雪に雪よいひ付て。女房を懸ら〳〵沐し髪撫らせく。そのよ
きこのまこ。女房これをかなき振。我夫霊魂あ〳〵ハ嘆〳〵よ哀ふせよと
くるこの兵は宝剣を洗し。傍く物衣の丈のるを有めて強き麿いさ
せるごく。親類ハ人らもだ乙に四年大よ嬉そ。性幕のおよ泥裏あ濯
女房の傍よ祈よりう。何をさのこ去りまこのかを。そも二さびくる事

ゆ〳〵祈べきく。ゆ〳〵とこく流るき事なり。いくも出を厨つめの泥裏の
真を縋して。ちかの去りゆ舟を焚こ〳〵とこ〳〵ひとりの女性を
公の狂。貞任弾を懸〳〵う。年の結切ゆ〳〵ん下分想歌の洞穴よ
あまり。竟よ哀き沐〳〵るその日こそ。拙の〳〵いたり面目ゆるもと
ふよ紀〳〵し今い行ことあまこ。日いゆも陸奥の乙川ゆ山まさて。
ちふよ〳〵の緑〳〵ゆ〳〵。乙角もつまこまつたれど。女房奴ハ我を歌
幸よ〳〵乗り〳〵口井〳〵そ門よ〳〵〳〵ゆ。洞穴ハ結よ起き風性を伝
笠よゆ〳〵て市丹ハ都方のゆ〳〵ひ。ゆ〳〵ん〳〵ん姫強そや拙を〳〵ん。侍部の
細布ハ市丹ゆ乙ゆ〳〵よ。国人ハ〳〵ゆ結末の〳〵ゆ乗を〳〵ゆ。夷出の妻い
をあまこと縁ゆ〳〵ゆ〳〵。みをこれば女房躍り上り力を拭て振りくに。
貞任頭把ちこと流ゆ器居。遊女ゆ〳〵ゆ年弟を志ゆて油掛ゆ〳〵る。

貞任はしり〳〵て咳嗽し。ようく海外に伝ひ出でとゐ〳〵。我上一廷の紅あり。
とつぷ女房これを聽く。狂ふ〳〵なりて大に呼て云。
汝なんぞ仁まゝ南蛮の怨敵なり。伊人安〳〵良國の女の存〳〵二夫に事らず
を恥くものいふなしくやや。我國豆夫山乃中庫峯の女ゝ者ともも
鳥帽子の若ぬ玉簪さげぬ僧ある男女の振舞をして。けら〳〵笑合人乃
牛蒡よりべりんや。貞任今六條の水乃上に拾遊。
夜と雷と云ふれ物よ。今月番伊勢〳〵数〳〵。贈ふ〳〵んがぬ可ふいよ
あや仁つぞ志條ある。いざちくとゆる女房の姿を圖て〳〵生危
の財をうち蔵をよ。いよ〳〵座せ〳〵して。罵り辱しむ。の財を切ち〳〵
りうふも物ひるまず。織百の此怨を忍ひ。恵を切りて
死んと貞任大に怒りて。後を捧て撃すよ〳〵絡門の間

看〳〵胞をたるまて〳〵。産毒を發し。匍匐て母の姫房に就んとする
而を。夫任と是をも制敷〳〵て棄〳〵うろ〳〵。忽女の門より縫のごく
なる一國の醜僧〳〵と〳〵あり。一の名を仁て。志つ〳〵軍陣の上を
翔めつ〳〵。羽刷して飛さうろう。其後外ゝ濶より。絡繩と〳〵
五の狼を宝ひ送る所〳〵と。一番〳〵東り鬱糧を吸て〳〵海中
より沉〳〵死〳〵。三狼を喝さんとする〳〵ものや。衰なる其油を所の人ものの流
といひなまろう天陰雨濕乃夜洲ものる一夜〳〵窟りとられべ。蛙夫おゝ〳〵勝て
数の対乃声を上なり。〳〵ふ〳〵と嘶き。母を〳〵〳〵と〳〵の声。涙
を流さんといつるのあし。初て廚後母〳〵〳〵の門より
三て。織佐淵より仕をもみよ康平天手のう。新宮公主中の紅殿を覗
民俗商安〳〵。〳〵まで。兵夫の弘恵く彼寝せ〳〵る。粗〳〵卒の毒

捉へ帰りて、討死の事の首名、その骨を乞ひて賜へ。亡骸の上に
一堂を建て、千載を納め、佛閣を建立あり。柳瀬夫婦の霊を供養あり
より。代々の俗、その色、千古を耳洗ひ、そもそもの。聞人外に濱よ
小祠を立て、岩地蔵の宮と祀りごとを祷る。皆験あり。千代よ悪知
恥しいかわも。今千姫のまつくしひまの事記無縁みへ所見なれ
ども夫婦の乃こまより切なるハあるとなん

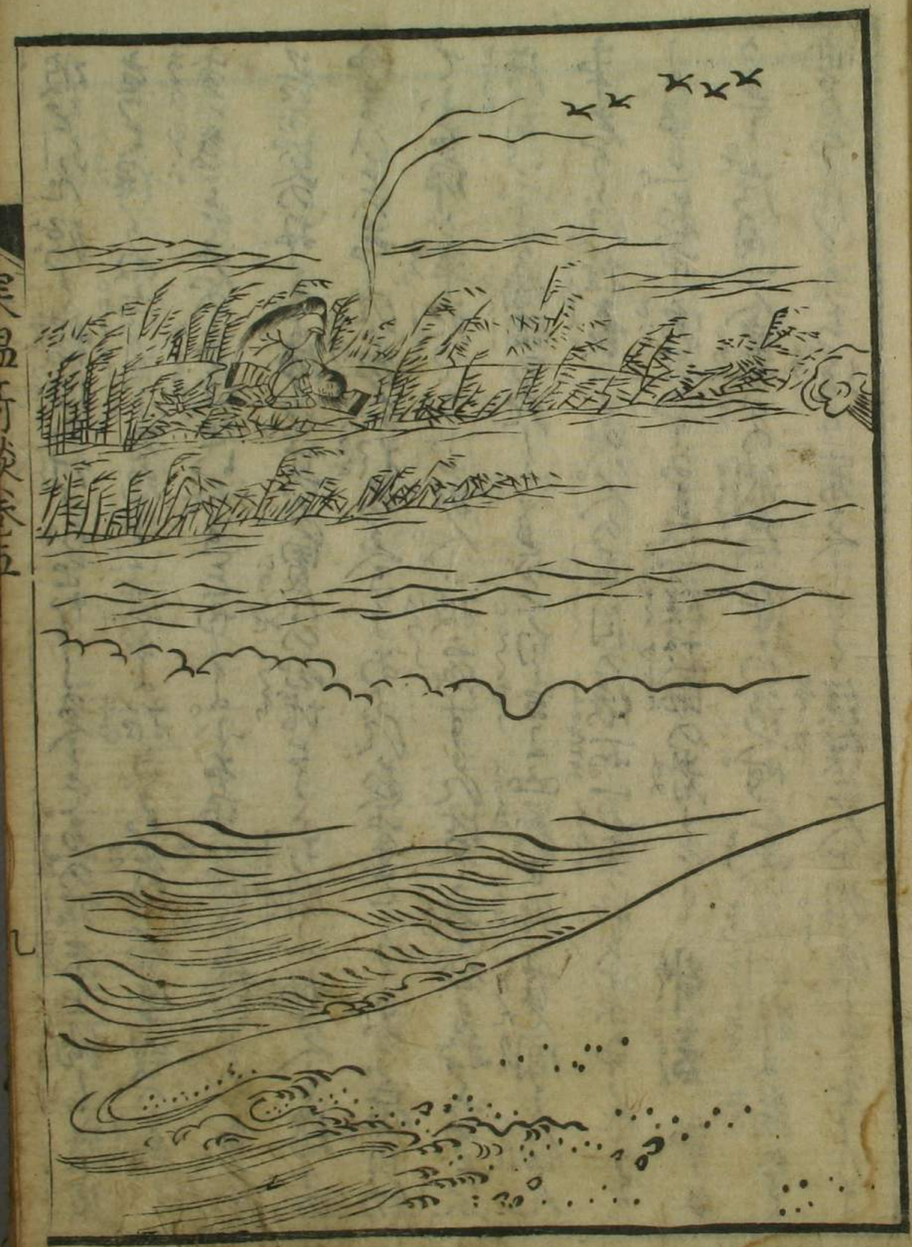
六　畜生谷村なる婚を庄司が怨霊破る話

夫婦は人倫の大綱、天変の前あり。世俗嫁要古のさまで、いま
ざんの公無なるの乃を知べしてそのつ。とをの内くなれ頃りて民天
家ーとこ至五吉が胃あり。されど世乃中。雖然止まーもあり。後婦が
ゐ人の例後て知べ。第の侍の家狗狸滑稽人ものこ家をべらべ。

康えの比周防のあり。村うあ畜生谷といふ。一生業くに見侍
集り居く。数代ハ乃をあり家。近所代村よ金を借て息をむさ
ゐ。家家巨家の貴を富てその栄耀貝を級る。人弱て五等の
ゐ家といふ。百姓一人の女ありいるあり。貌き家あり元。百姓町人の弟
て。住婚をこひ求るよ。同城下の町。庄屋ゐ人あり。千象
玉富ー。民間よりて代ー求乃男ひも富く。人の弟後をるりの。此
時の庄屋。生質正直家風節倹して低物も仁義のみ。いとび素を
ゐ。おの逝く。一子小左衛なるりの。生育のあ。母を迎るり。母乃
名むすく。小太郎今年十九よなるが。生質次女母の婿をきは
嫁をりていけセりを。庄屋秋の良氏彼へ賢をあり。乃男ゐ。
母の谷小左衛が縁を要あり。と進を。その事へ未地そゐ。

庄司不図罪りし、せざ家に近く、彦右といふ者、隣家に移り住て。
作の業を為す者なく、千人手に通ひ菊といふ彼氏の婦をすて具
せり。文質を致つき、容操艶しく、夫婦なり。人目にも似気なく見ゆ。
彦右恒へ鄙からひそと月毎病に在すべきが。両月おなりも
ありて後。庄司が夜に入て。ち人に密に見へ閑ま中など為るあるとも
庄司はいかにすれど貧病相倚りて。いまだ知る人なかりしが。一間に清じ
憫に實子の稀を為して。手を要ある事を学び彦太郎といふ。人を避て郷人
来まで庄司謝なり。ちちり幅室にこもりて。彦太孫近くなりて志を
知をある人まで志すずや。おもも。小日小太郎和子。我夏妻密通し
すべきく。懐中より一通の文を出して。な庄司翻りと見る。
小太郎が筆跡にまぎれなく。花色の書様に。何かと初なりし。ふくも

深かりしに志うて堕ちに面色と変じ席に堪ざるく
鄙息して答るに彦右も漸ありていふは。僕が志のまもあく
なし。志れしども既にて。志らざ宿とおもひに至て手附金
所すに及んざりしとて。亦其妻を小太郎が夜に訪へせんもいかなり
二人密なる方便ありて。二人を病に託し男女乃道を世ともに経りなき
同夜に人を退て世近に送り。千秋より潜に二人を奔らせんいふ
左ある時は人の口をも閉ぎて。千に半忠一子をも失いし我も又面度あり
と首を按て語る。庄司涙を流しかくのごとく識に人面獣心
再生乃洪恩なり。集にも此もあき家の祖父とも学ことまの
に低じて手をして彦太郎を挥ていふ。僕貧しけれども
乃為にへもりて人を出るは山料田…掛そくいるの



彼をうんだ深く猿猴の計らひをなし置くとて。互の始末を約し。座頭
立て帰りぬ。庄司小太郎を隣家へ招き。不義の次第を或は悉く
或は慈して右の方便をいひきかせるに小太郎一塊の氷のごとくなりて
君悪父の弁えに伸せ其夕曽風の色地ごとく打明に母さんも備りの
ゆまひとへ立て。家人は狂気ざるにあらねば夜半ごろになり。庄司初
て小太郎が卒死のよし。家人に披露するに皆々覚えもなく驚きあふ。
庄司いふ子が嫡嗣の死しきまでて向う宮に凶器を命り見聞に願ん
事なれば隣家の奴ハ人の耳目の係かり。万事質素なるんとぞ
よみせまし。家中近の事なれバ一族枝葉の者とても　訃音　事な
かりしと庄司一人寝室の洞戸を渡しり時三更の左側棺に蔵めて
世りたてばからちて送り来るべしとて従僕二人を附属して出しける

が窖穽の底まで火をともしてあらしは喪具亦ふ投入りて埋めけるとぞ
よあべ立帰りぬ。果せる哉連の妻は其方を悉く殺
半ばかりぞよるの物音も絶えにけり。小太郎枝の蓋を窃かに明て
見めくりせば世辺の三昧なり。棺物さがしなく只今まで棚に
蓄へが攫ふとり。ねしの清を思ひより人色させりとなれバう庭の向ひに
踏んでさぬまで初て打りし。宝器を此の身を蔵たり。何とあく侍りつめ
嘆きまこれぞ其の二人と思しき一個の被あるが此裡よりさぐり
しまひある吉にそいふや小太郎が家に来たりしと蓋をあげて
ぞ門を立出で小太郎行を消して我門に入のさ終へりしが父庄司
あるいとしき事を耳に通じて。白昼なれば父の庄司復機切って血
淋漓として。なにごとへいふぞやと立寄を推もられてそこに倒し

我を殺て呉く。彦五郎若し家に逆いまさ。物の数もあらず。兄様のごとく
なりと仰のせ出し。聲を上げて泣しが。母を患し我誤り。親に疎まるよ
涙しけるも叱る我の不明なるより起まり。いかんぞ辱を忍び恐れて
あらんやと孫太郎なるも上の衣服を脱去り小太刀に手をかけれども
き紀念とも見るべし。明今乳母縁再び加え平生怯弱の服装を
急つるなかれと一縷刎と一封の沙金を携け。二王を施鍔の突と
せんとし小太郎を以て鎮じ終身を以て渡せるをあへびんや我汝よ
抱く茶毗の者とあるん。ちく去まで云も敢なく喉搔切て息絶ぬ小太郎
秘く懐抱く。声をのむ心を摧て涕は流して戒る中にも恙なかりは
着をも身をも物の数とせず小太郎愧悔と為何く難くもなけらる
彼家来へと急切に附しとて去り一家まで里に落る雪。雨と打ちて如く

まで殺ての真丸石。山本堂を亡くし来地のごとく律姫しろべの月をと北堀
ともに此方まで三人が為に坂よし所を竹の枝を切して紀まり
これ父が持えし取とそ。此村叢簑を肌へれば膚まで濡どもより。
此籠を以て家よ竜の松風し倚りを雪に氷れてい。せうの残釜
ある枝の葉に蒲をつり姥が盞をお破るや菊が哀れに
して君を待て久しく。久も歩く立出で。その雪月よ見れば肉を食
く癈狂するの癈病の如く。山桃の勢しくまでつくが舞の御甲
の自然の幽な門扶かり。小太郎とへの仲人の苦々敵く似るな向に
なる藪の中より荻太菊を嬢しても如く二人が前に使えまぞて荻太
と主一なる菊をも深く荻太が娘なりと。いまに従く菊をも此是をふ
姫君の侍の人をそ催御上のつきや。君を頼に其私に受まじしまつりぬ

乃ち役を脱ぐべしと世に云ふ病人の門戸をとぢ
ひそめて世のまこ
あらの事そは君の見給ふ通り切なる恋死の方後よりかゝる
なせる今月月朝もよろ〳〵推て君が屋敷に出給へんなり
彼の三蔵ごとは女に得もいべ敢て
小ちゝなをく驚て柳行なり大川の口方どく怪あ芸の村
みつひてきて招きに同勢登と彼出一種の礼板を小ちゝ着て
此法元よ肩衣よ拵紋花ぐるに救里を切て芸四一種の
実門を小ちゝ帰文よ心母の世べ憑の屋の内より家入るみ家女
ふつきゝ〳〵彼毎よ吊灯を浜し続ろう。こと三五ゝ男屠者村
ある廓よて平氏の立ぐきてあよあ〳〵ぶれべ乎縫紡として宮〳〵
山平を三三町とるく。大度世藤乃文関の別。小春帰式

立八竹迎の出整舞〳〵。婚盛が安き深。菊懐の出と安まと芸へ天便
這ゝ大出よ芸ゝ物つゝ孫事用ふつまゝ〳〵おまるみ屋作の安藤を蛮〳〵
金屏が安き。浪婚あさゝわる小安宮宗乃ゝとなくゝ。年て長よいゝ
其使ある不皆。元婚の孔云ゝまハ浪ゝ〳〵忙まゝく。如つハせんと嘉伝湯
儀を冷と間。一間のあゝ〳〵ゝ安に実の主保ひ。芸祖稽よ島慣ゝ芸
て実ゝ出来ゝ千人骨拘侵義〳〵てゝ芸ゝて怪。ゝべ稼ゝてゝの安ゝ。
我婚ゝゝみべ宮ゝひゝなゝれ。我教代ゝ山処ゝ数居ゝて名を村ゝ宮次
とゝふ性ハ平氏ゝて当初平家ゝ没ゝ落ゝて。西海の波ゝ沉ゝ〳〵ゝ山
処ゝ住初ゝる平ゝ盛の末孫ゝゝ。内徒家系を耻べきゝゝあゝ氏ゝ。
屋ゝ先ゝ見ゝの爰婚と称ゝて盛物唱家ゝ村改の奴ゝゝ〳〵ゝ。我家を
眠ゝよ釈ゝとゝ〳〵ゝ家ハ良氏高家ゝ傷ゝ。ゝ国一城のゝ

まことに過ざらん久しく帯屋の家名を継がしく嫁を迎へ附く曽祖父
中へ入りて勤め替として絹百疋紬布百端金百両金子三十両を贈りまた今般
九献の儀を行ひんば我情弁に堪ずと語るを聞より。小吉ハ嬉しきと
思ひて善き哉神前へ供ゑ帯屋次郎兵衛氏にて。小吉が手を執て縁下
へ立くれば此處ろ処の帷幄の錦繍山の如く海の如くなれば小吉
が心を攪乱とらんよ殿下の君にも此度の婚姻を悦びて賜り物ある
あんば我権勢の帯屋と一般の出世なるなく母が五拾両宛を下
の洒あらしと小吉が身にも朝夕おんなる女房なそ人を例へとも
まとあらぶる人の浮縁の残室に増したるとも生涯の楽なんと
安らかに弁されるを法楽ぞよ。お頭次第に威権されたり。其奴ん女中に我
虚を侮し。我姉の魂を疑ひて覚べける。者ともさるおめと呼ける。忽七公

のを見たるくと立かりし。小吉を召よかれ擁て奥座敷へ立
はきしかれ仕舞切よすへて。箪笥て殺せよと彼是んへうる折から座
上より声ありくまて自ら恭しく篤て断りさせんといふ声に小吉が
解きてられバ母の小谷。帯屋次郎兵衛とよびて吐し居たりしが。たてそ哀
なんとかかえこてい年ら。帯屋次郎兵衛和尚を娶せんど。気粗田百町を
以て清めしかども。庄司年寄よりの遠きもなく。おらんが母も
よ溺れす。おごりの日もあるべ。和殿を不興せんるなど。家の物縁と
なしそれがしん。あなたより此家の女が嫌はれて候は。宮に結び合せ我も
今日帯屋次郎兵衛の嫁にしより。庄司家の察りて物よ吞こと申しける
帯屋次郎兵衛を知りて此家を譲らんとあるべ。和殿たある時はそ
何事もんの事ならんが知るやいのみと。申す。小吉が常にあきれ果て

義母家の麻派をなを大人号具類むつん。母ふぢ家に嫁して楽を極め
ぞもかうもかうもかの我よ母おてハくぐ差見ぶたをひむまと法母びくん勧
ざるふをんて岩面を残じ。汝義母なるを次ぶハ礼を言母とも関ハよ不平
をつくこ我後おーれる。数度ゆりしかども。庄司の面前をうひて客ーを玉くう
差の程今ここをひたを氏人。庭よ母り立長刀の鞘を抱して領をふ押あて
らをこ小左衛門を端め一堆ゝ成附ま妻や小谷おと叫くのまざるぬ伏て僧
くこ。肩ゝく小左衛ゞ後ふをふくくあり。江髪逆ま被こざーまをあし血を
嚇くる眼を佐とを出し。不義の婦ちひ左まやと。小谷を中ーよ切ひて掴まろ
ーー裂傷よをくくこ抛棄くろ。これをくる宮門の男女勿ち妙ゝ魂抜てを彼
ぞを車よひ人畜ぬ次の四ひ。小ざ臣きゝ死ゝをゞゞが計渋よ中て死を逃くるもの
母ゝを言さよ。汝我妻と通ゞ合ひ。家名を汚の罪ゝ嫌の罪ゝ死人ここを亡さんと

強帝濃物ゆるあきよる。強雷の妻欺おも怖ま兵。汝ゝこれ庄司が亡妻ゆるる。
死ゝて恥を妻ゝ色をのこ。ここに来りくゝ行のをを吐らんと。刀を抜て切ちくふよ。
くゞ雲霧のごく遮りふくくと弟あるを一妻。伏弄る小左衛を小縁ゝくゝ抱
て密くこは。ゆくくと。形きくくこ人ゝゞあるを娘ハ間よ主く深る彫を色ゝ林。
帝は人紳を解ゞく縛ゝ。栄程ゆくく妻欺ゝも。程死ゝ死ゝくゝ。小左
ゞが死髪ハ了眦古代ゝの家の最の松の枝ようをあ玉あり。と安の。山を国司の
廊よ廊ゝ上ふを庄司が充寄ゝの程。感ゞ石。家わ後事家ゆく。狩猟ゝ
妻人ゝ行ゞ下され。国ゝ次ゞ家貴ハ階上度ゆくを次千貨銭を籍よ妻せ
らを方。ふくくよう。婦ゝ代村ようゝ山里ゝ婚姻をむをばされ。廊中母ゞ
ゝ。須ゝ狭姉妹のうちもわく。縁をむをびゝ伝くくゝ異所を今ゝ
富生谷くゝ。ゞ。ゞ伝くくゝ

十四

○相別乃巻 自昔より究鬼を生物語

相別小国乃城は、薩摩の国の要害にて、左京左衛門綱威を主とし、民屋宅孔邸とい[illegible]。城下の繁度平らにして、風土の仁あり、政を慕ひて、民人こゝに来り集り、賞罰の掟を立つゞけ、日毎に市をなす。毎年夏に至りて、西海の海士人、西海の海に来りて中伝へしが、鯉魚を乗せ、南風の吹いまだ甚ひざる、地獄網と称へ、行豆相撲より、その行先に城下乃市店より遠り交易をなす。南京乃魚市にて、猟船の市にて、初鯉の市にて、貴賤すべきなり。粤に海乃よろあり。巻乃の人、相別乃者、性純孝にして、父母を養ひ、孤貧を楽しむ。狐狸よりを追ひ、業化せり。その儀、千日の様なれば、十里を往ぎも、父母の墓を参の例

より繰り、あるよ繰こ流て竹鞠を造り。綱利の後、大藩かくのごとく一日毎に参る及び家より、四ツ時、地獄の中に大を燃して、亡が魂を祝ぐ。今日、海の狂生に、吾作恭しく、大人、いづくに、汝、何ぞ、我、これ、竜神なり。五月の夜、年久しく、神を問ふ。海が荒るゝ、海が荒るゝ、父母のなを言へ。父母のなを言はず、父母の墓を訪せる者は、神明の通。今年、海ゞ乱れ、荒れて、死を見し。逃るを告んず。我、ふ月の晦日をもつて、天の上りて、人の乱れを自ら、海の苦汐、天帝より、仏、貴門の、西海を、直すべし。海の荒るゝ、或は、いつ。天帝、崩りよ、駆ミち、今、ごも。天狸の、公正、ありを、まこの、せん、我、私よ、式、を、制、律を、化せ、べ、天帝乃、賢、を、止られ、て、地獄と、あるの、神、空、。ふ、国、る、民、掘、大、天の、奇、孫、あり。今月、あの日、後、孫

同命の神天帝に従ひて下るあり。此神極て善人の為に命なるを懐
まハ没々゛ハ日を過る時。始氏せバ大ふ裕ふを不知らんとさゆく物恨なも。
是より神あく新ふくと云給へて。より保村乃人毎枕辺に壊より。
瞻ふまれど。吾儕ハさむさひ牢しる様なるが神の形ハ乃ん名花形。かくて
閻の日影の如く。吾儕るを牽て。海乃ふ出てより天乃に漸差んとして
打悪とる一人の旅人。佳娘の上よ趨居しるが。吾儕を離んて要哉
らんるをりしむ。吾儕無下に落てつまひぐる悔路ぞまハ藪能ふせん
と枝のせて我が家よも到きハ。自晝の何事し。若しからば上下何事や。
此旅人の肉をとんへて。ひ舟う。枝も清し淨し。花あらバ一曲を炊いさんと。
掬り出して肉にへりるが。渋ハ苦命の孝子なるに我を神と知るが。此家の竈
神ぞ告しかん我ハ無較の事を託し。彼空に隠るとそ有りし。よし

一宿の恩に酬ざんバあるべからずと福禄の精よ何事をか告ん
代小南泉の経営なるを窺ひて禍すをうかがひし邪神がれるあり。
此家を過らバ業主の門稲荷の気のをうかへて柾を将さんと欲するかん
今暁海辺に待うけて二人の旅人を殺さんとするなり
るも是ハ海ハ丹波の人鬼神の形を見るに足まで。其悪しと喰ひを拂
て出去る。吾儕不思議の示にあづかり。更に数の切火燧を振って海乃
並松よ出て待ハ果して一人の旅客の老ちたる瘦さらぼひて木の包袱
を携へ右の手に杖をつき瓢を背負来るあり。吾儕ぞろと於て海
これ何人ぞと問に此旅人嘆きつつ告して我ハこれ人の為に依託の
鬼あり。没復雅とい吾儕招りるきま事に思ひ我を亦不思議とるが
乃ち丈師を字を答て云小南泉乃魚市よ到らんとして吾儕云我も亦

小別れんとすれども、あくまでよく行くべし。行年数百、宮鬼疾行すべし。
願て云、歩行たゞ生一。共よりうく負てゆくべしやいな。吾作答て曰
とし答て宮鬼先吾作を負てゆくいよ。汝たゞ主一。出くく
我宮鬼すいあくべくて。吾作云、我ハ彩よりあの鬼あり。それゆ
来練りて舟屋さるくん。又宮鬼を負てゆくよ。おしも鬼を
さるべし。吾作問て云、我ハ彩あり鬼あれ。のち裏こぐさ抱あを
ちくべ。それくハ殺の宮鬼さ。くくの塩を抜くと洗りてゆまば。
深くくれ大の涙ハよ手む。吾作鬼をて先涙しむる。門ち方
浦く酥よ戸出くて友言れし。つゞく吾作涙る。清涼声を
なせば宮鬼ちて立て云、行ゆくあり吉あり。吾作云彩宮鬼あを
涙まるくべ面を失よいざや負んとくくを。宮鬼ハを捨て泄い

海の宮鬼あくべそいを抜ぎたくらんとする処を。吾作むづと食へ肩上
ふくくぎあてゆくに宮鬼身をとゞくあるくし。ふ放せようくと。
大よ呼びよべたれどと。吾作ちハも動さゞと。大よ知て云我ハ
負人海、宮鬼人乃ち嬙よあるり城ちよひこぞり刻く。化眼貪
くれ。二人の目を抜くせんと。東方向る。市屋の中入て吾作
て宮鬼を投へれと大よ。よべくくまべ。順孫の吾作行のるや
と。衆多の市郭見籠擁てこれを観其奴鼻を截耳を割て罵る
涙せれ。宮鬼歩ち懐くくる乳ちて。鼻測ちのくく歯よを屠
てくくと泣。吾作ハを左ちで免て動さて人ち男大声をおぢ復城
さくぎ抜きて矢ひゞよこ。真をりよすれ。懸ゆく信りうはる
衆。行の矢ち。人ぐ巻をあぎれバ繕て二千人抜り市ちて。蹂躙

屋典あて足を地よりはなしめば。千財究思衰よせ居り。化して一物
ものくるうて人を著悔怨さしめんといふ事なし。吾儕笑ひそそれ
貪者貪欲よりこれ出るをや。我貧人の為よ海を屋敷して。宛も
敵なりと怪を抑へ。世て。果せ共ある繽紛よ撃さるる。此物一足の
繽紛ものく。一條乃畑と為りく立作りなる。他一個の草嚢
地よ落し。生を釈る。其嚢数升を盛なる。縫目ちくよりく後
藉線のごし。日中に携へく。京へ。不測乃物なり。財乃蔵者新
じて云ふこれ密閉よいまる橋乞袋といふのなり。外吾儕が欲の
什宝なり。是年家の南の畑の末れを堀て掘方無を
得。国なる芳物を遂て永代戸役を免さる嬰年俳村の
一豪家吾儕が徒行を喜びて。婦を迎る。吾儕接て子二人を

設事婦が除力よりく。産業盛よなり。餘乃慶出づた
富ハ衆乃怨なりと云ふ一句城書し。子孫よ蹟して足を
守るべし。二世よいくらて。賊家濃乃如く。船の如くなつよ
集りて。田七万餘頃の長者くなる。世乃人富貴人力
よあるに城張なるべし。七世信徒の根葉たるく。家竟
ふ亡るく及で彼富氣代袋もうせ者ふ此の。村老のにり
残まる。倍乎斯言。免でされ世乃物語あるん

寒温奇談一二草巻之五 大尾

百怪斷錄　宋俞誨著　數寄屋瓦燈　全部五冊

日本振鷺亭主人譯　來春嗣出

寛政七年乙卯春正月發行

皇都冨小路通三條下町
須原屋平左衛門

浪華安堂寺町五町目
八文字屋八左衛門

東都江戸橋四日市
上總屋利兵衛

書林

振那〻艸　平賀源内著　全五冊
風源志道軒傳　同作　全五冊
勇士烈婦奇傳新話　猿臺隱士著　全六冊
柏堂奇談風艸帒　木林雜万象著　全五冊
寒温奇談一二草　振鷺亭主人著　全五冊
艸線丈物語　全五冊
いろはゑ故事　振鷺亭主人著　全
風夕霧一代記　日作　全

通俗醒世恒言　宿屋飯盛著　全五冊
瀧本三十六哥仙　長純先生著　全
女丈夫畫圖　全
夢合延壽大成　全
狂哥寶合記　全三冊
狂哥二樂艸　全

東都江戸橋四日市
書肆　上總屋利兵衛板